近世港町の成立経緯と都市形態
－近畿・山陰地方日本海沿岸を対象として－
Formation process and urban morphology of the early modern period port towns
: Focusing on Kinki and San'in Region located on the coastal area of the Sea of Japan

宮澤　崇史*・岡崎　篤行**
Takafumi Miyazawa*・Atsuyuki Okazaki**

Studies of early modern towns are conducted in Japan to grasp their history and culture. However, there are fewer studies of early modern port towns compared to castle towns. It is not generally known that several early modern port towns located on the coastal area of the Sea of Japan were built as outports of castle towns. The purpose of this study is to uncover formation process and urban morphology of early modern port towns located on the coastal area of the Sea of Japan. As a result of the analysis , there is a tendency that the town structure of the harbor side was rationally planned, and on the other hand , the inner side was unregulated.

Keywords: port town, early modern, Sea of Japan, urban morphology, Matsue, Hagi
港町、近世、日本海、都市形態、松江、萩

1. 研究の目的・背景

現代、歴史文化資源を活用させたまちづくりの必要性の高まりを背景[1)]に近世都市研究が進められている。しかし、城下町に対して港町を対象とした研究は少ない。土木技術が未成熟の近世以前、都市形態は自然地形に大きく影響を受けていると考えられる。そこで、近世港町が成立当時の展開・様相を明らかにすることは、近世都市の基礎的な都市形成史を把握することに繋がり、近世都市研究及び港町研究の基礎資料にできると考えられる。

中世由来の瀬戸内海や近代に急速に発展した横浜・函館等の港町は広く周知されている。しかし、近世初頭に城下町の外港として日本海沿岸に建設された港町の一群は広く周知されていない。又、北見は著書[2)]で「港町」の機能的配置として、中心は「天然の良港」であり、その周辺に港施設を中心に倉庫・問屋が海に面して並び、その背後に茶屋・商屋・船宿等、さらに背後に民家・武家屋敷・行政機能があり、最も外側に社寺・山林等が展開され、町の構造は全て港に通ずる道路で結ばれているとしている。近世港町にこの配置が為されているかを明らかにすることは、近世都市及び港町の基礎的な都市形成史を把握する上で必要と考える。

以上より、本研究では近世港町の網羅的研究の一環として、日本海沿岸地域における近世港町の都市形態の特徴、及び成立経緯と都市形態の特徴の関係性を、自然地形と都市との関係性に着目して明らかにすることを目的とする。

2. 研究の位置づけ

港町の成立経緯に関する研究は、近世港町の空間構造の特徴及び変容の仕方を明らかにしたもの[3)]、近世港町の特徴的な仕組み

【表-1】対象候補地の抽出に用いた広域の絵図及び記載内容

場所	史料名	作成時期	記載内容			文字判別	場所	史料名	作成時期	記載内容			文字判別
			航路	湊/港	地図記号					航路	湊/港	地図記号	
広域	日本海山潮陸図	1691	○	×	×	△	兵庫県	但馬国大絵図	1787	×	○	×	△
	日本山海図道大全	1703	○	×	×	△		〈天保国絵図〉但馬国	1838	○	○	×	○
	四方海辺図	近世中期	×	×	×	△		〈兵庫県御免許〉開港神戸之図※3	1868	-	-	-	-
	大日本海岸全図	1853	○	×	×	△		〈大日本管轄分地図〉兵庫県管内全図※2	1901	×	×	×	○
	大日本国海陸精図	1903	○	○	○	○		日本交通分県地図 其十七 兵庫県ノー	1925	×	○	○	○
	日本総部及附近諸海	1915	×	×	×	○		日本交通分県地図 其十八 兵庫県ノ二※3	1925	-	-	-	-
	水路部出版海図区域一覧図	1931	×	×	×	○	鳥取県	〈天保国絵図〉因幡国	1838	○	×	×	△
京都府	近江山城丹波摂津図※1	近世中期	-	-	-	-		〈天保国絵図〉伯耆国	1838	○	×	×	△
	丹波国絵図※1	1704	-	-	-	-		因州鳥取城図	近世後期	×	×	×	○
	丹波国大絵図※1	1799	-	-	-	-		〈大日本管轄分地図〉鳥取県管内全図※2	1901	×	×	×	○
	丹後国大絵図	1815	×	○	×	△		日本交通分県地図 其十 鳥取県	1924	×	○	○	○
	〈天保国絵図〉丹後国	1838	×	○	×	△	島根県	寛永出雲国絵図	1633	×	×	×	△
	京都古図※1	近世後期	-	-	-	-		出雲国十二郡図	1636	×	×	×	△
	〈京都〉太閤御縄張聚楽図※1	近世後期	-	-	-	-		元禄出雲国絵図	1702※4	○	○	×	△
	〈大日本管轄分地図〉京都府管内全図※2	1901	×	×	×	○		雲州地図	近世中期	×	×	×	△
	〈大日本管轄分地図〉京都市図※1※2	1905	-	-	-	-		〈天保国絵図〉隠岐国	1838	○	×	×	△
	日本交通分県地図 其四 京都府	1924	×	○	○	○		〈天保国絵図〉出雲国	1838	○	×	×	△
								〈天保国絵図〉石見国	1838	×	×	×	△
								〈大日本管轄分地図〉島根県管内全図※2	1900	×	×	×	○
								日本交通分県地図 其二十三 島根県	1925	○	○	○	○
							山口県	防長両国大絵図（正保長門国絵図）	1649	○	×	×	△
								周防長門大絵図（元禄長門国絵図）	1702頃※5	○	×	×	△
								御両国測量絵図（伊能大図）壱番※6	1821	×	×	×	○
								御両国測量絵図（伊能大図）二番※6	1821	×	×	×	○
								御両国測量絵図（伊能大図）四番※6	1821	×	×	×	○
								御両国測量絵図（伊能大図）七番※6	1821	×	×	×	○
								〈天保国絵図〉長門国	1838	○	×	×	○
								御両国絵図（天保長門国絵図）	1838	○	×	×	△
								従摂州尼ケ崎至長州萩府道中細見	1865	○	×	×	○
								長門国全図	近世後期	×	×	×	○
								〈大日本管轄分地図〉山口県管内全図※2	1901	×	×	○	○
								下関市街新地図	1922	○	○	×	○

【凡例】
記載内容　○…史料等に記載されているもの，×…資料等に記載されていないもの
文字判別　○…記載があり判別が容易なもの，△…記載はあるが判別が困難なもの，
×…記載を確認できないもの，　- …検索語句により対象絵図であるが抽出不能なもの

【補注】
※1 日本海沿岸地域ではなく内陸を描いた絵図
※2 旧目録「大日本管轄分地図」として一括する資料の一部
市街地を描いている箇所も参照
※3 日本海沿岸地域ではなく太平洋沿岸地域を描いた絵図
※4 1702年作成，1710年写
※5 元禄国絵図は1696年に作成が命じられ、1702年までにほぼ全国の分が完成
※6 1800-1816年実測による全国測量をし、1821年に完成した大日本沿海輿地全図の一部

* 非会員 新潟大学大学院自然科学研究科環境科学専攻 (Graduate School of Science and Technology, Niigata University)
**正会員 新潟大学工学部建築学プログラム (Architecture Program, Faculty of Engineering, Niigata University)

や施設の態様及び変遷を明らかにしたもの[4]がある。港町の都市形態に関する研究は、日本全国の近代港町を地形と都市形態により分類したもの[5]、湾による地形を基に港町の形成及び変遷を明らかにしたもの[6]がある。

3. 成立経緯と都市形態

3-1. 調査方法

対象地域内で近世に港町として存在した地域を、広域の絵図及び文献により整理する。広域の絵図選定においてはインターネット検索を用いた。検索語句は、第1群「海」「五畿七道」「府県名」「旧国名」「旧国名の別称」と、第2群「絵図」「国絵図」の単語それぞれを組み合わせ対象となる絵図は49枚(表-1)となった。これらの絵図より次の3つの条件のいずれか1つでも該当するものを対象候補地として抽出した。第1条件は航路の線が岸付近を経由していること、第2条件は「○○湊」又は「○○港」と文字にて記載を確認できること、第3条件は港の地図記号を確認できることである。但し、大日本管轄分地図においては新町名を対象とする。文字の判別が難しい地域は距離や地形より推測する。広域の絵図による対象候補地は101箇所となった。文献による調査においては「日本海運史概説」[7]、「港町のかたち―その形成と変容」[8]、「北前船寄港地ガイド」[9]、「北前船の近代史 海の豪商たちが遺したもの」[10]等の書籍より港町を選定する。又、当時の文献史料により港があることを確認できた際も対象とする。文献による対象候補地は、32箇所となった。以上の対象港町を合計した107箇所（重複除く）の中でも表-2の史料より復元図作成もしくは分析に可能な絵図・古地図等が確認できた、田辺、宮津、久美浜、香住、松江、濱田、杵築、須佐、浜崎、赤間関の10箇所の港町を本研究対象地とする。

上記10箇所の各対象地について、成立経緯を市史等の文献を基に整理する。加えて、絵図・古地図等を用いた史料調査により成立・拡大を迎えた近世年間における復元図（図-1）を作成し、それを基に都市形態の特徴を把握する。絵図等と航空写真を比較し、町筋を基に目安の寸法を測定する。なお、鳥観図のように復元図作成が困難であっても分析可能なものも調査対象とする。

3-2. 各対象地の成立経緯と都市形態

(1) 田辺 / 舞鶴（現 京都府舞鶴市）：舞鶴湾は古来海上交通上重要な地であり、1672年西廻航路が開かれてからは、由良川河口の由良湊が船の停泊地となり賑った。近代で特記することに舞鶴鎮守府・海軍工廠の設置とそれに伴う軍港建設がある[11]。都市形態としては、L字型の町であり、河川に沿った町筋とそれに直交する町筋、城下による町が確認できる。東側に城址、西側の山麓に寺が点在しており、北西の海側に蔵が集中するほか、城址の北部にも所在する。一部の絵図では北西の蔵周辺に堀割による水路を確認できた。

(2) 宮津（現 京都府宮津市）：平城宮出土木簡「宮津郷烏賊二斤太」が宮津初見である。中世には国衛の地として政治上重要であり、丹後における宗教文化の中心地、さらに室町-戦国期には守護所の所在地でもあった[11]。都市形態としては、海岸線と並行に伸びる町筋が3本とそれに直交する町筋が確認できる。河川東側に城址があり、西側に対して堀割が多い。西側の山麓に寺が点在しており、河口に蔵が集中している。一部の絵図では蔵周辺に堀割による水路を確認できた。

(3) 久美浜（現 京都府京丹後市）：中世に荘園久美庄が拓かれ、中世末には港町として楽市楽座があったと考えられ、浜には500軒あり、熊野郡・竹野郡の奉行所在地であった。久美浜湾を経て外海の日本海に通じる交通の要地である[11]。都市形態としては、海岸に沿って郷倉・夫食蔵等が並び、それに通ずる道があり、さらにそれに直交する形で海岸線と並行な町筋が確認できる。町の西側には久美浜城跡[(1)]があり、その東側に代官所が所在、海岸線と平行な町筋はそれに通ずるように伸びており、河川沿いの町筋は確認できない。寺は町の中心及び、東側の山麓に点在していた。

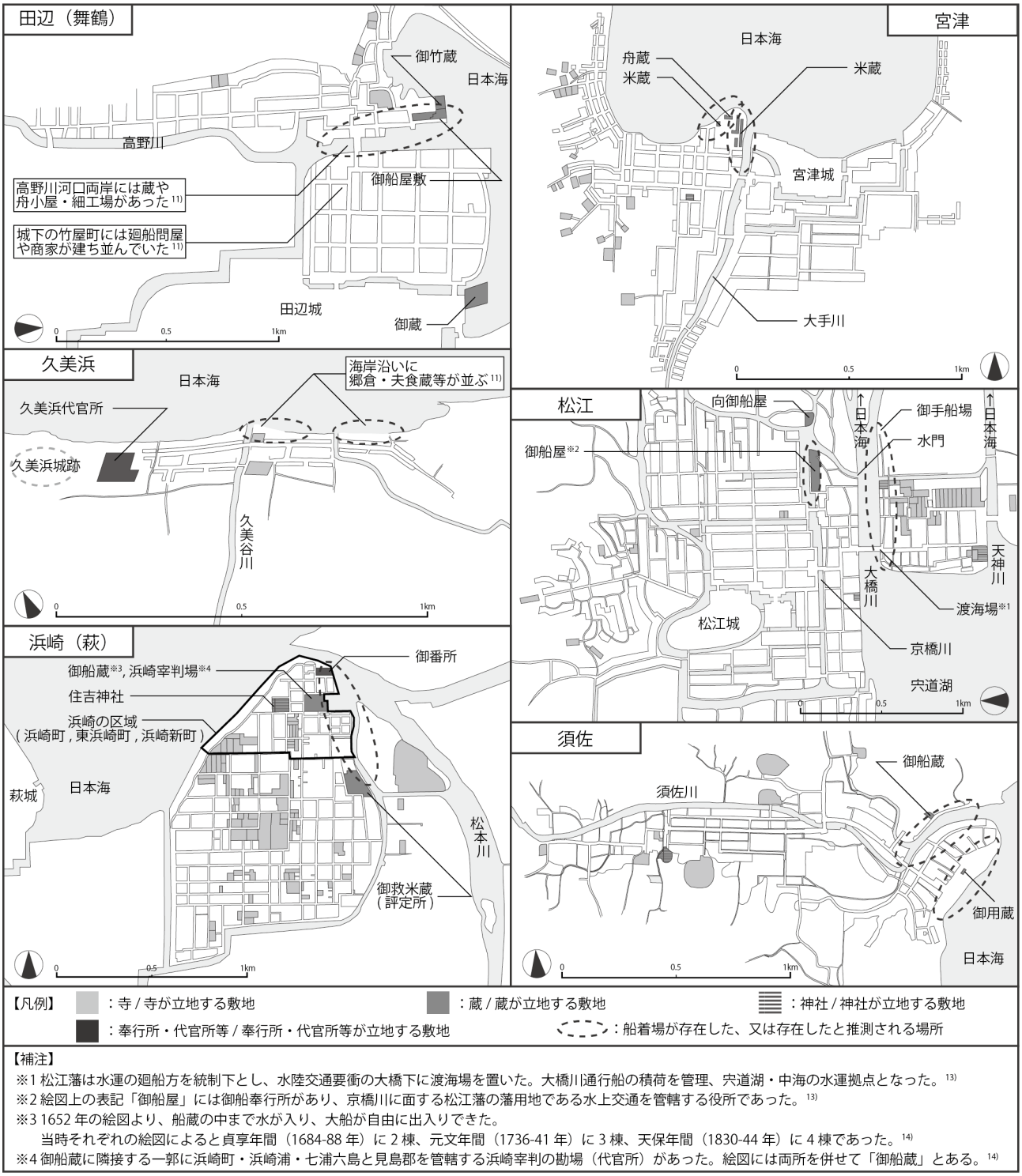
(4) 香住（現 兵庫県美方郡香美町）：1557年但馬国にしかた日記に「かすみ村」とみえる。香住湾の東に面する一市村は漁村の一面を有しており、後に回漕業に進出する者も現れ、廻船問屋清水屋「諸国御客船帳」には1805年に入津が記録されている[12]。都市形態としては、香住谷川西側に河川と平行な町筋を確認でき、その先端の河口部の港と約1km上流に河港がある。河川の港近くには渡し船を確認でき、その周辺に建物が集中している。

(5) 松江（現 島根県松江市）：松江の地は16世紀まで沼沢の入り混じった田園地帯であり、農民・漁民の民家や寺社が点在していた。17世紀初めに富田城城主堀尾氏により城と町を一体として同時に建設された計画的な城下町である[13]。都市形態としては、宍道湖及び大橋川と並行になる東西方向の町筋とそれに直交する南北方向の町筋が確認できる。大橋川北側に城址があり、堀割が張り巡る。京橋川沿いに「御船屋」があり、東から御船屋・

【表-2】町構造の調査・分析に使用した史料

場所		史料名	作成時期	町筋	寺	神社	蔵	船着場	所蔵元，掲載元
京都府	田辺	田辺御籠城図	1600	◎	×	×	×	×	永青文庫
		田辺籠城之書	1600	◎	×	×	×	×	瑞光寺旧
		京極期丹後田辺之城図	1600年代	◎	◎	×	◎	△	京極家
	宮津	正保宮津城絵図案	1645-48	◎	○	×	×	×	宮津市立前尾記念文庫
		宮津城下絵図(1)	1654-60	◎	○	×	◎	×	個人A
		宮津城下絵図(2)	1660-66	◎	◎	◎	◎	×	兵庫県歴史博物館
		宮津鶴賀城郭之圖	1845	◎	◎	◎	◎	△	宮津市史史料編
		与謝之大絵図	江戸期	◎	○	×	×	×	成相寺
		丹後国宮津城図	江戸中後期	○	×	×	×	×	国立国会図書館
		丹後宮津城之圖	不明	◎	○	◎	◎	×	筑波大学図書館
	久美浜	久美浜村地籍図	1873	◎	◎	×	×	×	京丹後市
		久美浜名所図会	不明	◎	◎	×	△	◎	舞鶴市
兵庫県	香住	昔の香住繪図	1831-45	○	×	×	×	○	香住の地誌(2)
島根県	松江	堀尾期松江城下町絵図	1620-33	◎	○	×	◎	×	島根大学附属図書館
		松江城屋敷町之絵図	1624-44	◎	◎	×	×	×	丸亀市立資料館
		出雲国松江城絵図	1644	◎	◎	◎	×	×	国立公文書館
		松江末次本町絵図	1688-704	◎	×	×	×	×	島根大学附属図書館
		京極期松江城下図	17世紀後半	◎	×	×	×	×	
		松江城下之図	1744-47	◎	◎	◎	×	×	島根県立図書館
		松平期松江城下町絵図	1825-51	◎	◎	◎	◎	◎	桑原文庫
		松江城下図	1861	◎	◎	◎	◎	◎	(財)絲原記念館
		松江城下絵図	不明	◎	◎	◎	×	×	鳥取県立図書館
	杵築	天保杵築惣絵図	1841	◎	×	◎	×	○	出雲大社
		杵築大社近郷絵図	江戸時代	◎	×	◎	×	×	出雲国造家北島英孝氏
	浜田	石州浜田之図	1579-69	◎	×	×	◎	×	浜田市教育委員会
		浜田城下町絵図(1)	1623-46	◎	◎	◎	×	◎	
		浜田城下町絵図(2)	1668-86	◎	×	×	×	×	
		浜田城下絵図	1737	◎	◎	◎	×	×	長田礼氏
山口県	須佐	須佐市中細見図	1841	◎	◎	◎	◎	△	近藤安弘氏
	浜崎	萩絵図	1652	◎	◎	×	×	×	山口県文書館
		萩御城下絵図	1865	◎	◎	◎	◎	◎	
	赤間関	下関絵図(1)	1829以前	○	○	×	○	◎	
		下関絵図(2)	不明	○	×	×	×	○	下関市立長府博物館

【凡例】◎…古地図，絵図上で存在，位置ともに確認できたもの
○…古地図，絵図上で位置は不確定だが，存在は確認できたもの
△…文献等で存在が確認できたもの
×…古地図，絵図，文献上で存在が確認できないもの



【補注】
※1 松江藩は水運の廻船方を統制下とし、水陸交通要衝の大橋下に渡海場を置いた。大橋川通行船の積荷を管理、宍道湖・中海の水運拠点となった。[13)]
※2 絵図上の表記「御船屋」には御船奉行所があり、京橋川に面する松江藩の藩用地である水上交通を管轄する役所であった。[13)]
※3 1652 年の絵図より、船蔵の中まで水が入り、大船が自由に出入りできた。
当時それぞれの絵図によると貞享年間（1684-88 年）に 2 棟、元文年間（1736-41 年）に 3 棟、天保年間（1830-44 年）に 4 棟であった。[14)]
※4 御船蔵に隣接する一郭に浜崎町・浜崎浦・七浦六島と見島郡を管轄する浜崎宰判の勘場（代官所）があった。絵図には両所を併せて「御船蔵」とある。[14)]

【図-1】復元図（田辺、宮津、久美浜、松江、須佐、浜崎）

御作事方・御船奉行所・相撲小屋・相撲長屋・御主水長屋・船玉稲荷社が並んでいた [13)]。大橋川南詰に渡海場があり、その南側には八軒の船場宿が所在し、その東側に寺が集中している。

(6) 杵築（現 島根県出雲市）：出雲大社の門前町として栄え、室町―戦国期に日本海の水運と商品・流通経済が飛躍的な発達を遂げるに伴い、斐伊川・神戸川の河口部に位置する出雲国最大の商業・港湾都市として成長を遂げた [13)]。都市形態としては、日本海沿いの浜に船着場があり、それに通ずる町筋が確認できる。しかし、直交する町筋はあまり確認できない。

(7) 浜田（現 島根県浜田市）：リアス式海岸であり、天然の良港を形成している。石見五港の 1 つであり、中世の中国・朝鮮の史書に名がみえる。戦国期には町並を成し、市も開かれていた。近郊特産物は外ノ浦・瀬戸ヶ島・長浜等の湊から諸国廻船により積出された。特に外ノ浦は日本海有数の風待ち港と知られ、船宿が多くあった。嘉永（1848-54 年）になると外ノ浦に代わり瀬戸ヶ島が繁栄した [13)]。都市形態としては、浜田川河口部右岸に城址があり、その北東の松原浦に蔵が集中している。松原浦周辺では直交する町筋が確認できるが、町内部においてはその傾向は見られない。堀割を城址のある河川北東側と、南西側ともに確認できる。寺は河川南側に点在している。

(8) 須佐（現 山口県萩市）：古くは朝鮮と交易に従事する船の避難場所であった。1726 年唐船一隻が漂着し萩藩が焼沈させ、吉田松陰は須佐開港を唱える。近世には萩から海岸沿いに益田に赴く現国道 191 号と重複する石州街道の仏坂道筋と、南に土床道筋が開かれる [14]。都市形態としては、日本海付近の町と、河川に沿った町で成立している。河川に沿った町ではグリッドの形成が確認できる。寺は河川に沿った町の山麓に点在している。日本海沿いに御用蔵、河川沿いに御船蔵が配置している。

(9) 浜崎（現 山口県萩市）：築城以前より漁村として海上交易の中継地であり、1604 年城下町成立後は漁港とともに萩城下の海への玄関口となった。漁業を主に魚問屋・仲買・回漕問屋等の商業活動が盛んであり、城下町でありながらも地方扱いを受け、浜崎宰判に属した [14]。都市形態としては、河港であり、蔵が分散して配置しているが、双方水路に面している。御船蔵付近では河川に伸びる町筋と、それに直交し城下町に通ずる南北方向の町筋によりグリッドが形成されている。御船蔵は、屋根を備える旧藩船蔵で今日残る唯一のものであり、国指定史跡である。寺は南側に集中して配置している。

(10) 赤間関（現 山口県下関市）：1739 年には現細江町辺りまでが赤間関域内であった。河村瑞賢により西廻り航路が開かれ、北前船寄港地となり商業貿易が発達。当初は南部町に寄港していたが、後に細江・伊崎にも寄港した。文政年間（1818-31 年）には米会所が商業機関として創設されている [14]。都市形態としては、海沿いに船着場があり、それに沿うように平行な町筋が確認できる。寺は山麓に点在している。

4. 各対象地の成立経緯と都市形態の比較

4-1. 成立経緯の比較

成立・拡大経緯が把握できた対象地域について、松江は短期間に町が成立している。他の町は長期間かけて成立しており、川沿い、海沿い、陸地とそれぞれ異なる方向へ拡大している。

4-2. 都市形態の比較（表-3）

各対象地を港側と陸側に分け(2)、町構造(3) ・社寺配置・蔵配置の項目について分類分けを行った。町全体でグリッドが形成されている対象地は 2 箇所（松江・浜崎）のみであった。町のほぼ全ての蔵が一定の範囲に集中している対象地が 4 箇所（田辺・宮津・久美浜・浜田）あり、集中区域は全て港側であった。集中・点在に関わらず蔵周辺には海・河川・堀割等水路が確認できた。既往研究 [15]の陸側に蔵配置が集中する点を除き、近い傾向が見られた。

5. 結論

(1) グリッドによる町構造は港側で形成されているが、陸側ではあまり形成されていない傾向が把握できた。但し、田辺と須佐においては川沿いに町が伸びる構造であり、やや異なるものであった。又、城下町である松江と萩においては全体的に計画的な町構造が確認された。但し、萩は港のある浜崎に限ると港側がグリッド形成、陸側が非形成の傾向である。

(2) 寺の配置は、集中・点在問わず港側に比べ内陸側に多い傾向が把握できた。城下町の松江と浜崎では寺町を確認できたがそれ以外の町では内陸側に分散している。

(3) 蔵の配置は、集中しているものが多く、集中している位置として最も多いのが港側の船着場近くであった。陸側においては蔵の存在を確認できなかった。

(4) 北見が図式化した「港町」[2]の町構造・寺配置・蔵配置に近い傾向が確認できた。

【表-3】各対象地における都市形態の特徴

対象地	田辺★		宮津★		久美浜		香住		松江★		柞蒸		浜田★		浜崎★※1		須佐		赤間関	
港側 陸側	港側	陸側	港側	陸側	港側	陸側	港側	陸※2側	港側	陸側	港側	陸側	港側	陸側	港側	陸※3側	港側	陸側	港側	陸側
町構造	○	◎	◎	◎	◎	△	△	△	◎	◎	○	△	◎	○	◎	○	△	○	◎	△
寺配置	△	△	×	△	△	×	×	×	◎	△	×	×	×	△	×	△	△	○	×	△
蔵配置	◎	×	◎	×	◎	×	×	×	○	×	×	×	◎	×	△	×	△	×	○	×

【凡例】対象地：★…城下町の一部
町構造：◎…グリッド※4が全体を占める町構造
○…グリッドが確認できる箇所とそうでない箇所が同程度混在している町構造
△…グリッドが部分的にしか確認できない町構造
寺配置：◎…寺のほぼ全てが隣接しており、一群が形成されている
○…隣接している寺と、点在している寺が同程度確認できる
△…寺のほぼ全てが点在している　×…確認できる寺が存在しない
蔵配置：◎…蔵のほぼ全てが集中している
○…集中している蔵と、点在している蔵が同程度確認できる
△…蔵のほぼ全てが点在している　×…確認できる蔵が存在しない

【補注】
※1 浜崎が所在する萩は城下町であるが、表内では"浜崎町"・"東浜崎町"・"浜崎新町"を対象区域とする。但し、蔵配置は水路により分散していることもあるため、絵図より読み取れた全域とする。
※2 香住は香住谷川のある東側が港側であり、西側は日本海に面するが、便宜上陸側とする。
※3 浜崎は松本川のある東側が港側であり、西側は日本海に面するが、便宜上陸側とする。
※4 河川又は海岸線に沿った町筋と、それに直交する町筋によって形成されているもの

謝辞

本研究の調査を進めるに際し、岡本哲志先生、新潟大学人文学部堀建彦先生、研究対象地の図書館・博物館の皆様に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

【補注】
(1) 復元図作成に使用した「久美浜名所図会」において「古山城」と記載あり。
(2) 当時の主要な街道の河岸・海岸等にある船着場側を「港側」、その反対である内陸側を「陸側」とする。
(3) 復元図より読み取れる街区やその構成要素である街路網の形状。

【参考文献】
1) 宮本雅明 (2005),「都市空間の近世史研究」, 中央公論美術出版
2) 北見俊郎 (1993),「港湾研究シリーズ 9 港湾都市」, 成山堂書店
3) 竹内滋・渡辺貴介・村田尚生 (1996),「近世における港町の空間構造に関する研究」, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol.31 , pp.277-282
4) 渡辺貴介・水野雅男 (1985),「港とまちの空間構成上の関連に関する史的研究」, 日本土木史研究発表会論文集, Vol.5, pp.111-119
5) 神山裕作・岡崎篤行 (2017),「港町の地形と都市形態による分類-明治末期～昭和初期の地形図による比較分析-」, 日本都市計画学会都市計画報告集, Vol.15, pp.208-211
6) 大竹将弘 (2016),「湾を舞台とした都市・港町の形成比較に関する研究」, 法政大学大学院紀要 デザイン工学研究科編, Vol.5
7) 古田良一 (1955),「日本海運史概説」, 同文書院
8) 岡本哲志 (2010),「港町のかたち―その形成と変容」, 法政大学出版局
9) 加藤貞仁 (2018),「北前船寄港地ガイド」, 無明舎出版
10) 中西聡 (2017),「交通ブックス 219 北前船の近代史 海の豪商たちが遺したもの 改訂増補版」, 成山堂書店
11) 平凡社地方資料センター (1981),「日本歴史地名大系 第26巻 京都府の地名」, 平凡社
12) 平凡社地方資料センター (1999),「日本歴史地名大系 第29巻 兵庫県の地名 1」, 平凡社
13) 平凡社地方資料センター (1995),「日本歴史地名大系 第33巻 島根県の地名」, 平凡社
14) 平凡社地方資料センター (1980),「日本歴史地名大系 第36巻 山口県の地名」, 平凡社
15) 石塚啓太郎・岡崎篤行 (2019),「日本海沿岸地域における近世港町の成立経緯と都市形態-東北・北陸地方を対象として-」, 日本都市計画学会都市計画報告集, Vol.17, pp.430-435